

幼い難民を考える会

CYRニュース

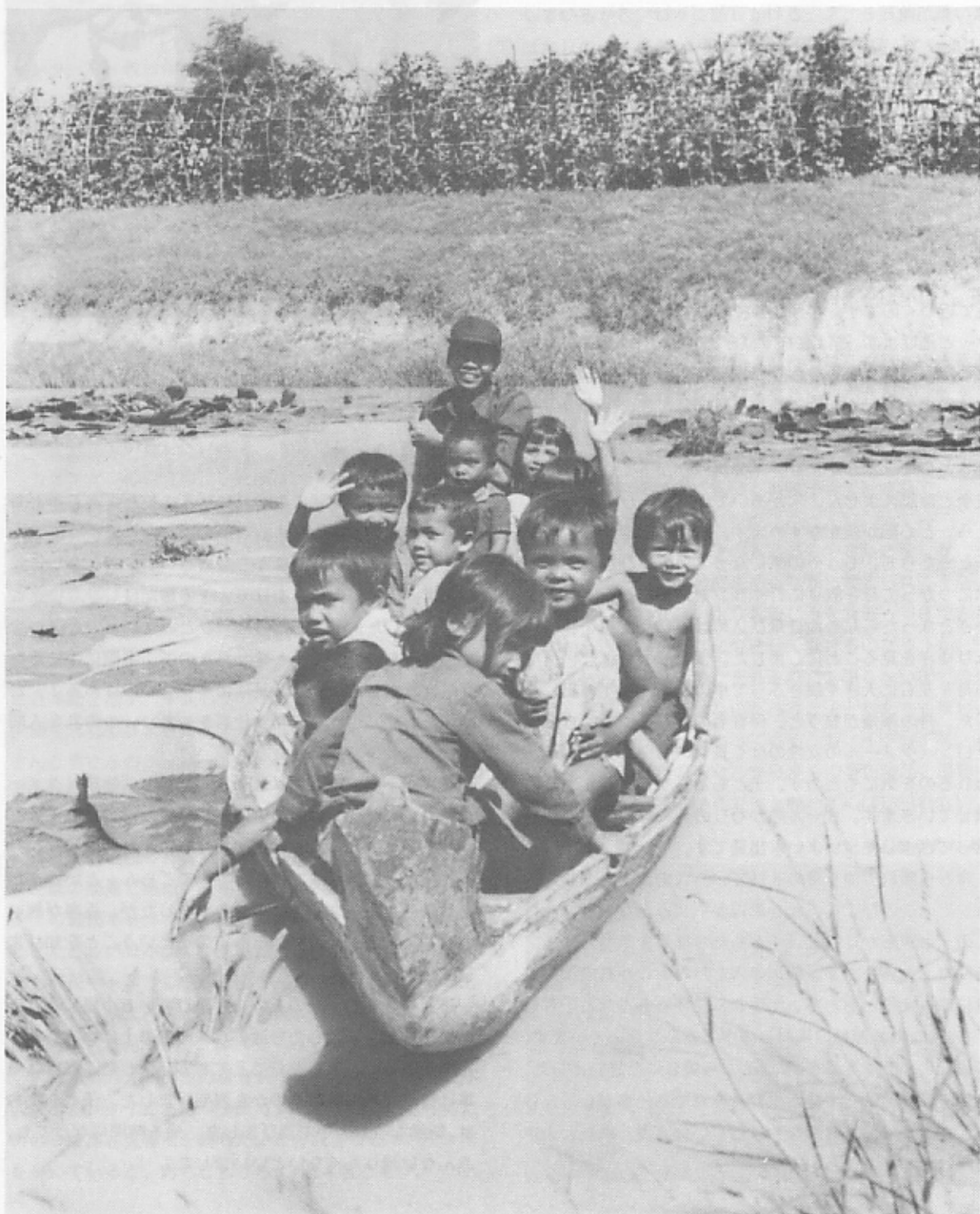


幼い難民に未来を

NO.

12

●150東京都渋谷区広尾4-3-1 ●03-499-1226 ●振替口座/東京1-36227



舟に乗って「アメリカへ」

豊島庸子

7月中旬、CYR保育園の子どもたちを連れ、カオイダン・キャンプにできた家畜の飼育場に出かけました。ここには兎、あひる、鶏、豚、牛などがいますが、子どもたちにとっては初めての見学です。飼育場にはいると子どもたちは、さっそく茂みのむこうにいた仔牛を見つけ、しきりにさわいでいます。ワーッとよってゆくのではなく、一番年長の子どもを先頭に、恐る恐る一列になって近づくのです。牛が少しでも動くと、子どもたちはサッと逃げます。逃げ遅れて泣き出す子ども、そばにいたおとなのズボンをしっかり握りしめる子どももいます。

池の土手で、みんなで蛙を見ていたとき、保育者のサンセスが子どもたちを舟に乗せたい、と相談にきました。見ると舟には水がたまり、半分沈みかかっているとても安全とは思えません。穴があいていたら、ひっくり返ったら、と心配が頭をかすめます。しかし、他のおとなも子どもたちも、もうその気になっていて、ひざの上まで水につかって舟を取りに行くサンセスを応援しています。いざとなったら私も池に飛び込めばいいやと腹をきめ、なりゆきを見ることにしました。まずサンセスは、何度も舟を左右に大きく揺さぶって中の水を少しずつ出しました。舟の準備が整うと、保育者のトリィボブは自分のサロン（クメールの女性は長くスカート）のすそがぬれるのを気にもとめず、子どもたちをひとりずつ舟に乗せていきます。オールのかわりの竹の棒もどこからか拾ってきました。いよいよ出発です。

岸から離れてゆく舟のそばで、ハスの葉の上の蛙がピョンピョンとびます。私が岸辺から「みんな、どこへ行くの」と声をかけると、子どもたちは声をそろえて「アメリカ」と答えます。難民の人たちのあこがれの国です。舟に乗った子どもたち、土手から見守るおとなと子どもたち。カンカン照りの陽射しの中でみんな輝いています。この絵のような光景を、私は心から美しいと思いました。今までCYRがやってきた保育者を育てる仕事がいよいよ実になっている。みんなすばらしい保育者たちだと大声で叫びたかったくらいです。



人みtainな牛 シャべる兎

カム・スエム

子どもたちと一緒に牛を見に行きました。ある子どもは牛を指さして「犬だ！」といいました。怖がって泣き出す子もいました。「牛はかみつかないよ、おとなしい動物だよ」と、牛の口をあけて、下の歯だけしかないと見せました。子どもたちは「ひとみtainだ」といいました。「何を食べるの」ときかれたので、実際に牛に草を食べさせました。私は「足は何本?」「つのはある?」と聞いたあと、牛は畑を耕す仕事をしたり、牛の乳を人間が飲むことを話しました。

うさぎ小屋の前で、私は子どもたちに「物語（クメールの有名な昔話）の中の兎はしゃべるけど、この兎はどうか」ときいてみました。何人かの子どもは「しゃべる」と答えたので、「じゃあ、呼んでみてごらん」といいました。子どもたちは、兎に呼びかけましたが、返事が無いので、実物の兎はしゃべらないのだということを知りました。

子どもたちを、池の上につき出している小屋に連れていきました。子どもたちは、ハスの葉の上にいるたくさんのかえるや、風車を見てとても喜びました。私は、風車は何のためのものなのかを説明しました。子どもたちは、新鮮な空気の中で遊びました。帰る時間になっても、みんなは帰りたくないといいました。

難民キャンプから贈りもの

日本の友へ

関口晴美

1年ぶりに埼玉県八潮市に住むチョアムさん一家を訪れた。チョアムさんは、1981年12月、タイのカンボジア難民キャンプから、日本に定住した。カンボジア難民キャンプ、カオイダンでは、「幼い難民を考える会」の保育センターで、教材作りや建物の修理を担当していた人だ。雨期の夕方、どしゃぶりの雨の中、保育園の庭の水はけが良くなるようにと、びしょ濡れになって溝掘りをしていた姿が思い出される。

日本で生まれた1歳8ヶ月のソフティ君を含め、4人の子どものお父さんである。チョアムさん一家の近所には、カンボジアの人たち3家族が住んでおり、皆、近くの椅子を作る会社で仕事をしている。チョアムさん一家は、4ヶ月前にそれまで勤めていた車の部品を作る鉄工場の仕事をやめて、友だちのカンボジア人が勤めるこの地に引越してきた。前の仕事より、体力的に楽になったと話す。それぞれの家族は、家賃2万6千円の1戸建ての家を借りている。

カオイダンの保育園にいた頃は、日本人の私たちがあいさつすると、なにかみながら両手をあわせてあいさつしていたグティ君は今、小学校2年生になる。私が訪れた日よう日の午後、近所の子どもたちと自転車遊びをして元気に家にもどってきた所だった。日本人の友だちもできた。

子どもたちは2年半の日本での生活から、とても上手に日本語を話す。4歳の女の子はもうすっかりカンボジア語を忘れてしまったとチョアムさんはいう。チョアムさんと奥さんのシッパーンさんは週に数回、1時間ほど日本語を習っている。ボランティアの大学生が教えにきてくれている。

第三国に定住した人たちが一番最初にぶつかる壁は、ことばの問題である。仕事の様子、子どもの学校のこと、タイの難民キャンプで一緒に働いた人たちのことなど、ただどどしい日本語で一生涯命話そうとしてくれる。いまも難民キャンプにいるソッサンから託された贈り物を手渡すと、集まっていた近所のカンボジアの人たちみんなとても喜んでた。

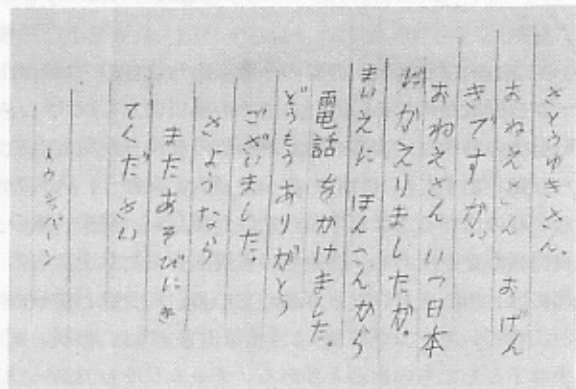
7月末にカオイダンの保育センターで働いている日本人数名が、タイにあるパナニコムという第三国定住のための一時滞在収容所を訪れた。この収容所のマーケットを歩いていると、あちこちから、3名4名と走りよって、

声をかけてくる人たちがいた。以前、カオイダンと一緒に仕事をしてきた人たちだ。なつかしように笑顔で、パナニコムでの生活のこと、一緒に働いていた仲間はどうかしているかと、口々に話しかける。2、3日前に着いたばかりの人、半年、1年と、第三国行きを待っている人、さまざまだ。カオイダンの保育園で保母さんをしてきた1人が手招きをする。マーケットの一角に私たちを呼んだ。そこに待っていたのは、カオイダンにいた頃より少し太った顔をほころばせたソッサンだ。チョアムさんと一緒に保育センターで織物の仕事をしてきた人だ。パナニコムにきて一年半余りになる。もうじきカナダに行けるようになると黒い顔に笑みをたたえていた。私が日本に帰るときと、首にかけていた金の鎖をはずして、日本に行ったチョアムさんに届けてほしいといった。

半日ほどの訪問だったが、私たちはたくさんの手紙とカオイダンの手芸クラスの友だちに、ボールペン一本ずつ、保育センターの近くに住んでいた人から、保育園に通っている親せきの子どもにと買ったばかりのビニール靴一足。保育園で働く人にとお菓子まで託されて、パナニコムをあとにした。

このようなカンボジアの人たちのやさしさを、私たちは、カオイダンと一緒に生活しながら教えられてきた。言葉でいい表わせないような苦しみを背おってきた人たちだからこそ、こんなにやさしくなれるのだろうか。チョアムさん一家はじめ、それぞれに、慣れない国での生活は、容易なことではないだろう。子どもたちも新しい地でたくましく育っていている。カオイダンで又、日本で会ったこれらの人たちから多くの事を学び、困難に負けず、共に生きていきたいと願わずにはいられない。

シッパーンさんからのたより



タイでの暮らしと人びと

美穂と愛って「アメリカへ」

内藤のぞみ

「コケコッコ」まだ5時40分。うるさいなあ。ゴソゴソ向こうのベッドのケイさん(タイ人)が起き出している。つられて皆も起きてしまう。裏に住む大家さんのご主人、赤い腰巻きをつけて庭の掃除。一番下の息子は鶏を呼び、エサをまく。アランヤプラテートの朝は爽やかに始まる。

7時30分。運転手のソムチットさんがやってくる。ソムチットさんは信心深い。朝、宿舎を出る時、きまってクラクションを鳴らし、手をあわせて1日の無事を祈る。祈った後はいつもの通り、時速90キロ。こちら祈る気持になる。

(こんにちは)荷物もたせて」救急箱、弁当籠、教材などを運んでくれる。サア、今日は何から始めるかな。それにしても事務室の蚊の多いこと。オフィスの人たち、保育者、子どもたちきいているかな。病気になる人はいないかしら。あれ、園庭でチャッカリオシッコしている。鼻を吸いながら遊んでいる子がいる。垢や埃の染みこんだシャツを着て跳びついてくる。子どもの体の感触、手の優しさはすばらしい。

「希望の家」には木工室もある。暑い中、黙々と仕事を進めてゆく大工さんの仕事ぶりは見事という他ない。

織物部屋。カットンカットンという音が響いては、また途切れる。切れた糸を結び直す作業はなかなか手間がかかる。

洋裁教室の片隅。警備のおじさん、ミシン修理係のおじいさんまでがクローマ(肩かけ、ターバン、腰布となんにでも使われる布)の仕上げに忙しい。隣りには小物入れに刺しゅうをしている人たちがいる。布は織られたばかりの粗地である。作業室のあちこちで小さなハンモックに赤ちゃんが眠っている。

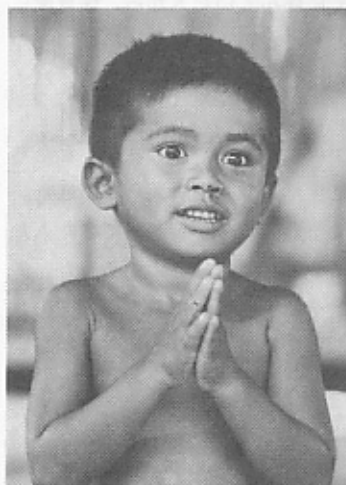


写真 左右 小林正典 中央上下 岸根立身

アランヤプラテートの町の8時。あちこちのスピーカーから国歌が流れる。人びとはその場に直立し、しばし、町全体の動きが止まる。曲が終わるのを待ちかねた人たちが動き出すとわれわれもキャンプへと向かう。人気のない緑の広がる道は車の動きだけが慌しい。途中、軍の検門所が2ヶ所ある。迷彩色の戦闘服を着た兵士たちの顔には、まだあどけなさが残っている。30分ほど走ったところで、キャンプに着く。「希望の家」では、毎朝、派手な子どもたちの出迎えがある。「チャムリャップスーワ

1日中、頭と肌を太陽からかばいながら動いていると、すぐ4時になってしまう。「チャムリャップリーヤ(さようなら)」と声をかけ、私たちはまたキャンプの外に出る。内と外の世界ははっきり分れている。

タイの夕日が落ち、宿舎での夕食も終えたあと、美容瘦身のために熱いウーロン茶を飲む。暑かった日中が嘘のように、アランヤプラテートは少しずつ涼しくなっていく。



ロップと子どもたち

いいぎり ゆき

ひだのたっぷりしたギャザー・スカートは、小さな女の子によく似合う。長い布を輪に縫い、ゴムを通しただけの衣服を、カンボジアの人はロップと呼び、10歳位までの少女がはいている。キャンプで、幼い子が、長すぎるロップの裾をつまみ、足早に歩いているのを見た。はだしの足が軽やかに赤土の道を踏む姿がいかにも愛らしかった。太陽に晒され、色あせた布の下で、しなやかに育っていく生命が感じられ、ある期待に包まれるのはこんなときである。ときには、姉さんのロップをはいた男の子も見かける。あるとき、坊主刈りの子どものロップ姿を奇妙に思って保育さんにたずねると、彼女はひょっとその子のスカートをもち上げて前を見せ、コロコロと笑った。「替えのパンツがなかったんでしょ」といわれた幼い少年は、立ちんぼではにかんでいた。しばらくして、また坊主頭のロップ姿を見たとき、反射的に「男の子」を思い浮べたのに、意外にも子どもの薄い耳たぶには、細い金の輪が下がっていた。髪にシラミがついたので頭を刈った女の子だということに、すぐ気がついたが、幼い子は坊主頭をなんとも思っていないのである。

ロップをはいた女の子たちが水浴びをする姿もまたかわいい。少女たちは馴れた手つきで、一人前の女のように長いスカートを胸まで上げると、頭から水をかぶる。そうかと思うと、遊びの最中、やおら両足を開いて長いスカートの前と後をよじり、股に通してショーツのようにしてから、高いところへ登ったり、ゴムとびをするのを見かける。

最近、このロップ姿に異変があることに気づいた。足くびまでくるようなスカートををはいている子が少なくな

ったのである。これはキャンプ内で、洋裁が盛んになり、日本でもよく見る短いギャザースカートが、子どもたちの衣服として定着してきたためである。実際に私たちも、こうした傾向を助長してきたことは否めない。キャンプの人たちにと寄付された布地は、どう見ても女たちのサロン（腰巻き）や子どもたちのロップにはふさわしくない素材や柄だからである。また、キャンプの人たちの、新しいものを好む傾向も無視できない。

ある頃から私たちの着物が、日常着から離れて、人の手を借りたり、着付け教室へ通わなければ身にまとえない晴着にさま変わりしたように、(そして、女たちのしぐさや歩き方まで変えてしまったように)カンボジアの女の子の素朴なロップや、女たちの優美なサロンやサンボット（丈の長いスカート）もすたれてゆくのかもしれない。

タイ・カンボジア国境ぞいの難民村では、相変わらず何十万もの人びとが暮している。深い密林の奥、バナナの葉陰に小屋が見え隠れする村もあれば、樹木を切り倒し、有刺鉄線で囲われたキャンプもある。戦場にそなえて壕をいくつも持つ村。脳性マラリアに悩まされる地域。水が極端に不足している集落。戦いで壊された村。さまざまな顔をもつ難民の暮しは、ますます険しく、終りのない不安と緊張の繰り返しである。

私の目の前にいる子どもたちも、すでに子ども時代の半分を難民として過してきた。この重苦しい事実が、私たちの日常にさまざまな問題を投げかけていると思わねばならない。

第四回定期総会ひらく

新たな対応を求めて

幼い難民を考える会第4回定期総会は、昭和59年5月27日午後、東京・広尾、宮代会館で開かれた。出席会員30名、委任状提出228名、計258名。議長に佐藤恒夫理事を選出し、議事をすすめた。

58年度事業報告

〈国内活動〉

●58年4月開設された、国際救援センター保育室運営の協力、保育室報告書「幼い難民に未来を」(準備段階より58年8月末までの経過報告)12月発行。写真展。現地活動報告会。資金集めの催し。会報発行、年2回。難民救援機関、他団体との連絡、情報交換。

●CYRは日本国内で定住するベトナム難民を対象にした援助を始めた。国際救援センター(ベトナム難民定住促進のための施設)にある保育室運営への協力がそれである。定住難民を中心に難民問題が国際問題から国内問題へと性格を変えつつある状況にあってのCYRの新たな対応である。

●国内で受けた助成金額 15,068,000円

〈海外活動〉

●カンボジア難民収容所(タイ・カオイダン)における活動。保育センター「希望の家」在籍幼児数は、年間、1,200人(2歳半～6歳)、保育者・職員73名。

付属施設の織物室では受講者79名、指導員30名、木工室専任職員12名、洋裁・手芸室、受講者360名、指導員18名。それぞれの技術訓練コースでは受講者の能力、キャンプ内での需要に合わせ、プログラムを工夫している。図書室、年間利用回数は1150回。

●58年4月、ユネスコ・アジア太平洋地域幼児教育会議(於ニューデリー、バンコク)いざり出席。

●カオイダンで活動している団体の中でCYRは保育者を養成している唯一の団体である。難民の自立を目指し、子どもの健全な成長を願う上で親の生活指導にも目を向け、独自の文化や生活習慣をまもる立場での子育ての意義を活動の核としている。

●海外で受けた助成金額 11,976,500円

58年度会計報告

次の通り、監事より報告された。

一般会計

収入の部 (単位 円)		
科 目	予 算 額	決 算 額
会費・賛助会費	3,500,000	3,484,550
寄付・募金他	8,000,000	31,529,650
雑 収 入	700,000	1,911,247
前年度繰越金	15,646,304	15,646,304
計	27,846,304	52,571,751

支出の部		
科 目	予 算 額	決 算 額
国内管理費	5,230,000	3,194,700
国内事業費	4,805,000	10,913,845
国外事業費	12,503,000	7,064,325
次年度活動準備金	—	11,000,000
次年度繰越金	5,308,304	20,398,881
計	27,846,304	52,571,751

補助金会計

(単位 円)

収入の部		
科 目	決 算 額	摘 要
今年度収入額	6,947,593	
前年度未支出額	5,485,075	
計	12,432,668	

支出の部		
科 目	決 算 額	摘 要
施設運営費	11,257,628	
次年度支出額	1,175,040	
計	12,432,668	

以上のとおり、58年度事業報告、会計報告は一括承認された。

59年度活動方針

基本的には58年度まで活動してきたことを継続し、内容的にCYR設立の理念に則り、充実をはかることとし次の方針を決定した。

〈国内活動〉

1. 国際救援センター保育室での保育指導の面での協力
2. 広報活動を活発にし、現地活動の意義を国内に伝える。また、会員に会の実情を知らせる。
3. 会員が参加しやすい行事を企画・実施する。
勉強会・バザー、日本定住難民との交流など。
4. 定住難民が日本社会で適応できるようなテーマを選び、カウンセリングを行う。
5. 活動資金を継続的に募る。一般募金の継続、会費徴収。
6. 会の活動にかかわる専従ボランティアの生活基盤を確立する。

〈海外活動〉

「若い難民を考える会」の設立記念に基き、タイ国内の難民キャンプにおいて、難民の自立援助活動を継続する。一保育、保育者養成、技術訓練(織物・洋裁・木工など)

59年度予算

国内会計

(単位 円)

収入の部		
科 目	59年度予算額	摘 要
会費・賛助会費	3,500,000	
寄付・募金他	8,000,000	
雑 収 入	400,000	
活 動 準 備 金	17,675,232	
計	29,575,232	

支出の部		
科 目	59年度予算額	摘 要
管 理 費	5,000,000	
事 業 費	13,000,000	国外(現地)給与、 運搬費分を含む。
国 外 繰 出 金	2,000,000	国外(現地)会計へ
次年度活動準備金	9,575,232	
計	29,575,232	

海外(現地)会計

(単位 円)

収入の部		
科 目	59年度予算額	摘 要
寄付・募金他	600,000	
雑 収 入	500,000	
国 内 繰 入 金	2,000,000	国内会計より繰入
活 動 準 備 金	2,723,649	
計	5,823,649	

支出の部		
科 目	59年度予算額	摘 要
事 業 費	4,500,000	
次年度活動準備金	1,323,649	
計	5,823,649	

特別会計Ⅰ(補助金会計)

(単位 円)

収入の部		支出の部	
科 目	59年度予算額	科 目	59年度予算額
今年度収入額	9,550,480	施設運営費	10,725,520
前年度未支出額	1,175,040	次年度支出額	0
計	10,725,520	計	10,725,520

特別会計Ⅱ

(単位 円)

収入の部		支出の部	
科 目	59年度予算額	科 目	59年度予算額
活動準備金収入	11,000,000	活動準備金支出	11,500,000
雑 収 入	500,000	次年度活動準備金	0
計	11,500,000	計	11,500,000

以上の通り、59年度事業計画、予算を承認された。

最後に、いざり代表より閉会の挨拶：現在の難民問題は緊急援助の域を離れ、政治的解決を求めて、新たな対応をせまられている。若い難民を考える会は、これまでの難民救援の体験をふまえ、単に心情的な関わり方にとどまらず、難民問題に関してオピニオンリーダーとなることが必要となっている。民間団体として何ができるか、また何をすべきか会員の声を積極的に聞かせてほしい。午後4時30分閉会

催しもの

1984年3月22日

アジア太平洋地域国際シンポジウムにいいぎりゆき出席。「カンボジア難民キャンプの救援活動を支える日本の民間組織」と題して意見発表。

総理府婦人問題企画推進本部主催。於、東京・平河町

4月15日

第9回幼い難民のためのバザー。食品、衣料品、屋台など。ボランティア総数70名で、準備、当日販売にあたる。於・東京・広尾。

5月27日

第4回定期総会。詳細は本号6ページ参照。東京・広尾。

6月3日

目黒教会バザー。現地製品のコーナーを設け、中でも絹地に人気集中。

◎ごあんない

10月14日

コンサート「160人の母のコンサート」主催。

歌の好きなお母さんたちが、難民となって苦しみと悲しみを体験した幼い子どもたちの救援を目的に、5年前から、毎年チャリティコンサートを開き、今年で最終回を迎えます。5年間もの間、一貫して歌う練習に励み、その成果を幼い難民の明日に託してきました。お近くの方は是非、当日コンサートにお出かけください。

とき 10月14日(日)午後2時開演

ところ 小倉市民会館

出演団体 北九州ジグアアカデミー女声合唱団、コールあじさい、明治学園母の会コーラス、女声コーラス萩の会、高見女声コーラス。



CYR 羽

- 2月29日 寺沢由紀、ボランティアとして渡タイ。
 3月21日 いいぎりゆき、一時帰国。
 22日 理事懇談会(事務局)
 4月10日 寺沢由紀、帰国。
 西村加代、内藤のぞみ、ボランティアとして渡タイ。
 17日 秋沢ヒロ、タイでの10か月の任期を終え帰国。
 26-28日 国際救援センター保母、小倉雪枝、矢野美代子、現地訪問。
 28日 理事懇談会(事務局)
 5月18日 いいぎりゆき、渡タイ。
 27日 第4回定期総会(東京・広尾)
 6月3日 豊島庸子、一時帰国。
 12-13日 ヴァン・リア財団、キアサリン・ショート氏 現地訪問。
 21日 西村加代、帰国。
 28日 安達勝、後藤憲夫氏他、政府定住調査団4名 現地訪問。
 7月7日 内藤のぞみ、タイでの3か月の任期を終え、帰国。その後、事務局ボランティア。
 7月23日 成沢貴子(事務局)渡タイ。
 -8月16日

事務局から

- 恒例「幼い難民のためのバザー」を10月28日(日)に開きます。皆様のご協力により、バザーも回を重ねるごとに収益もあがり、PR活動の場ともなっております。皆様のご協力おまちしております。
- 会の発足以来、5年目に入り、活動も定着してきました。これも会員の皆様のご援助によるものです。ご承知のように会の運営は月額500円の会費で支えられています。会費納入をお忘れのようでしたら、お納めくださるようお願いいたします。
- 夏休みの研究課題に難民問題を取り上げ、文化祭で発表するという、都内の中学生グループ13組が事務局を訪れました。現地の難民の生活を知る者として、できる限りの説明をし、どうしてこの活動に重要な意味があるのか伝えました。子どもたちの心に根付いた平和への望みが、確実に次の世代に伝わっていく、その為の種まきの役目を果たせるようお願いながら。
- 今年度のニュース発行が遅れ遅れとなり、ようやく、12号を発行しました。広報活動のひとつである、このニュースを1号でも多く、会員の皆様に届けられるように励みます。ご意見をお寄せください。
- 事務局スタッフ成沢が7月渡タイしました。次号ではその様子も載せたいと、準備をすすめています。